

関西外国語大学イベロアメリカ研究センター



Boletín

2012 / 3

del

Instituto de Investigaciones Iberoamericanas

目次

■会報創刊に寄せて	頁
関西外国語大学理事長 谷本榮子.....	1
関西外国語大学学長 谷本義高.....	2
イベロアメリカ研究センター長 林美智代.....	3
■年間活動報告	
第1回スペイン語教授法研究会.....	4
第2回スペイン語教授法研究会.....	10
■国別リレーエッセイ<ペルー>	
関西外国語大学教授（大阪大学名誉教授） 染田秀藤.....	14

会報創刊に寄せて

研究と交流の“架け橋”に

関西外国語大学理事長 谷本榮子

イベロアメリカ——。スペインとポルトガルのイベリア半島と、メキシコ、ブラジルを含む中南米地域の総称ですが、大方の日本人には馴染みの薄い呼び

名でしょう。特に南米は私たちから見ると、ちょうど地球の裏側。そんな立ち位置も影響しているのかもしれません。

でも、この地域はたくさんの不思議とロマンが詰まっています。その一つが、最近、終末論で話題の「マヤ暦」です。「2012年12月、世界は終わる！？」。巨大なピラミッドを築き、高度な数学や天文学を極めた、驚きの古代文明が“発信源”だけに、テレビのバラエティー番組などでも興味と関心と呼んだようです。

本学は外国語大学ですから、イベロアメリカ研究センターの“仕事”は語学関連が中心となりますが、私個人としましては、中南米の壮大な文明や文化、民俗、自然などにも調査・研究を広げてもらえれば楽しいなと思っています。

会報が、みなさまのより活発な活動と議論の架け橋となりますよう期待しています。

交流史に名を残すことを期待して

関西外国語大学学長 谷本義高

本学のスペイン語学科は1966年、4年制の外国語学部誕生に際して英米語学科とともに、関西外大を牽引する車の両輪として発足しました。ポルトガル語圏も含めた地域の言語・文化の教育・研究と国際交流を主眼に、イベロアメリカ研究センターが設置されたのは2010年。2011年度には、「スペイン語教授法研究会」が2回開かれ、その活動は軌道に乗り始めています。

日本とヨーロッパの初めての出会いは1543年8月、ポルトガル船が種子島に漂着した出来事とされています。以来570年の歴史を経て、両国をはじめ、地球の反対側に位置する中南米と日本は、固い絆で結ばれつつあります。公開講座でもある本学大学院の「ラテンアメリカ特別研究リレー講義」でも産業や文化などが広く紹介され、市民の認識も深まっています。

イベロアメリカ研究センターの会報の創刊を機に、事業を一層活発化し、こうした長い歴史の一コマにその名が刻まれるよう願っています。

新しい地平を求めて

イベロアメリカ研究センター長
林 美智代

イベロアメリカ研究センターはスペイン語教授法の研究と国際交流の充実を活動の柱に設立されたセンターであり、ここによりよく創刊号を発行し皆さんに活動報告をさせていただくことができるようになりました。スペイン語教授法の研究も関係の諸先生のご尽力をいただき緒についたばかりですが、グローバル化の時代、スペイン語教育とその目指すところも世界の動向と連動したものに転換していかなければならないという意味において、たいへん重要な活動です。教授法研究の成果とスペイン・ポルトガル語圏の豊かな知識に支えられた質の高い学生がイベロアメリカの大学へ留学し、いつの日か日本とスペイン・ポルトガル語圏の懸け橋となる人材に成長するよい環境づくりに貢献できるよう、今後の活動を充実させていきたいと考えております。



年間活動報告

第1回スペイン語教授法研究会

テーマ：専門スペイン語教育の試み

日時：4月9日（土）午後 3:00～5:00

場所：関西外国語大学本館 2階多目的ルーム

<発表者と発表題目>

①和佐敦子先生（関西外国語大学）

「初年次におけるスペイン語教育の現状と課題」

②Paula Letelier 先生（関西外国語大学）

“Curso Intensivo de Español”

－ 発表要旨 －

① 初年次におけるスペイン語教育の現状と課題

関西外国語大学教授 和佐敦子



本発表では、関西外国語大学スペイン語学科1年生を対象とする初年次におけるスペイン語教育の現状と課題について報告し、専門スペイン語教育の2つの試みを紹介した。

スペイン語学科に入学する大部分の学生にとってスペイン語は初修言語であり、初年次には将来の基礎となるスペイン語力を身に付けることが目標になる。ここでスペイン語の基礎力というのは、基礎的なスペイン語運用能力を獲得することであり、そのためには、聞く・話す・読む・書くという4技能を順序立てて過不足なく導入していくことが必要であると考えます。

1年次のカリキュラムには、コア必修科目として、「スペイン語初級文法」、「ス

ペイン語演習」,「エスパニョール・オラール」の3科目があり,初年次のスペイン語教育の中心となっている。従来の初級文法と演習の授業では,言語知識の獲得が中心になっており,listening, reading, writingについては,「聴き方」,「読み方」,「書き方」の指導にまでは及んでいないのが現状であった。そのため,2年生以上で特に読めない,書けない学生が多く見られる。本発表では,このような現状を改善するために作成した初級文法と演習のテキストの一部を紹介した。これらのテキストは,文法の授業で学んだことをもとに演習で応用力を付け,エスパニョール・オラールで実践するという考え方のもとに作成したものであるが,近い将来,4技能の段階的な獲得を目指し,理論的な研究に基づく教材の開発が不可欠であると考えている。

次に,専門スペイン語教育の試みとして,Web ブラウザを利用した教育支援システムである Blackboard を利用した「Poco a poco 学習コース」と,昨年度から始まった高大連携プログラム「アミーゴプログラム」について報告した。

「Poco a poco 学習コース」は,学生の自律的学習を促進するため,教務部の倉田主任の協力のもとに作成したもので,主に作文と語彙の練習問題から成っている。倉田主任から利用の仕方についての説明があった。「アミーゴプログラム」は,梶田純子教授と Di Martino 教授が中心となって,2010 年度から,春と夏の年2回実施されている高大連携プログラムである。2泊3日のプログラムに参加した高校生は,その後のフォローアッププログラムを受講し,厳正な選考を経てスペイン語学科に入学する。本プログラムの内容を写真や DVD などで紹介した。

専門スペイン語教育の主な目標は,大学で学んだスペイン語が将来の職業と少しでも結びつくようにすることである。そのため,第1に,



4 技能の段階的な教育のための研究が不可欠である。第2に、貿易、法律、医療、教育、観光など専門分野別のスペイン語教育の研究が必要である。本発表では、これらの研究の必要性を主張し、研究により得られた知見を共有するための「スペイン語教育ネットワーク」を構築することを提案した。

② Curso Intensivo de Español

関西外国語大学講師 Paula Letelier



El Curso Intensivo de Español, CIE, es un programa de estudios que, como su nombre lo dice, fomenta un aprendizaje intensivo del idioma y la cultura hispanoamericana.

Fue creado en el año 1994 para que los estudiantes del Departamento de Español profundizaran sus conocimientos del idioma e incentivar el interés por la cultura de los países de habla hispana.

El programa está dividido en cinco cursos:

- Dos cursos iniciales, con estudiantes de segundo año. CI
- Un curso intermedio, con estudiantes de segundo y tercer año. CA
- Dos cursos superiores, con estudiantes de tercer año, CS

Los cursos tienen 4 clases semanales, impartidas por profesores españoles y latinoamericanos, en las cuales se debe hablar solamente en español. La idea original de este programa era que los estudiantes tuvieran la oportunidad de escuchar una clase de contenidos de la misma manera como si ellos vivieran en un país hispanohablante. De este modo, ellos podían participar en una clase de historia de España o de México, historia del arte, pueblos precolombinos o literatura, según la especialidad de cada profesor. Con el paso del tiempo, el curso ha cambiado, con un mayor énfasis hacia el estudio de la lengua. Los estudiantes siguen abocados al conocimiento de temas hispanos, pero ahora se privilegia la incorporación de vocabulario, la comprensión de lectura, la comprensión auditiva y los ejercicios de redacción.

El objetivo general del Programa es desarrollar las competencias

comunicativas de los estudiantes y conocer aspectos culturales de las diferentes sociedades en las que se habla el idioma español. Cada nivel tiene, además, sus propios objetivos específicos:

- El curso CI persigue ampliar las habilidades comunicativas de los estudiantes. Este nivel se divide en dos clases de curso intensivo y dos clases generales de oral

III y IV, estas últimas obedecen las directrices, los objetivos y el texto determinados por el Departamento de Español.

- El curso CA refuerza la comprensión lectora y la redacción escrita.

- El curso CS, profundiza en el estudio de la lengua española. Este nivel es el más avanzado, por lo tanto, se espera que los estudiantes después de varios años de estudio puedan participar e interactuar activamente en clases de historia, arte, economía y realizar comparaciones entre sociedades tan diversas como la hispanoamericana y la japonesa.

Para ingresar al programa los estudiantes deben aprobar un examen escrito compuesto de 60 preguntas sobre gramática, vocabulario e historia y tener una entrevista con los profesores encargados de las clases. A continuación son asignados a uno de los cursos del programa para realizar el estudio de la lengua en el nivel que les corresponde.

Desde su creación, con diferentes nombres y enfoques, el programa ha promovido un conocimiento profundo del idioma y la cultura de España y Latinoamérica. En nuestras clases han participado muchos estudiantes que han continuado estudios de postgrado. Posteriormente algunos de ellos, se han dedicado a la enseñanza del español o han conseguido trabajos donde se



requiere un alto conocimiento del idioma. Con esto, no pretendemos vanagloriarnos de nuestra enseñanza, al contrario, queremos resaltar la calidad de las personas que han decidido ingresar a CIE. Estudiantes con inquietudes que han sabido sacar provecho de la oportunidad que les brinda Kansaigaidai de participar en estas Clases Intensivas de Español.

＜参加者の感想＞

関西外国語大学准教授 長瀬由美

スペイン語専攻の学生に対する教授法を研究することを目的として本学イベロアメリカ研究センターにて発足したスペイン語教授法研究会により「専門スペイン語教育の試み」をテーマに昨年4月、その第一回が開催された。

中部や関西圏で、第二外国語としてのスペイン語も含め、同言語を教授なさっておられる多数の先生方のご出席を頂いた。質疑応答も実に活発なものとなり、ご出席下さったスペイン語教育者の意識と関心の高さが伺えた。昨年度から導入された新教材をフォローする、Web ブラウザを利用した教育支援システム「Poco a poco 学習コース」や、スペイン語母語話者の教員によりスペイン語のみで展開されるCIE(Curso Intensivo de Español スペイン語集中コース)プログラムには、注目が集まった。英米語学科を持つ本学の強みを生かして、スペイン語と英語とのバイリンガル教育に着手することを勧める鋭い指摘もあった。

スペイン語を専攻出来る大学は日本に十数校であり、本学は関西圏の私学3校のうちの一つである。この言語は、スペイン本国をはじめ中南米諸国などの世界20カ国の公用語で、3億人超（中国語、英語に次ぎ世界3位）という多くの人々によって話されている。国際連合の公用語でもある。今回の研究会は、このように、極めて国際性の高い言語を今日の日本において専攻言語として教授する責務を果たさんとする意欲に満ちた第一歩であった。ここに今後の躍進を祈願し、「スペイン語教育ネットワーク」の構築に尽力することを誓いたい。

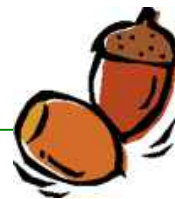
＜総括＞

関西外国語大学教授 和佐敦子

第1回スペイン語教授法研究会は「専門スペイン語教育の試み」をテーマに本学スペイン語教育の現状と特色を紹介した。特に、CIE(Curso Intensivo del Español)プログラムは本学スペイン語学科の最大の特徴である。本プログラムの発展のために長年尽力してこられた Letelier 講師が学生のアクティビティなど具体的な授業内容を紹介し、参加者の高い関心を集めた。当日は、本学教員のみならず、他大学でスペイン語教員として活躍している卒業生など約60名の参加者を得て、成功裏に終えることができた。スペイン語専攻の学生を対象とするスペイン語教授法研究会の発足は我が国初であり、今後も本研究会を長く続けていきたいと思う。



第2回スペイン語教授法研究会



日時：平成23年9月24日（土）午後3:30～4:45
場所：関西外国語大学 CALL 教室(5201)及び同時通訳室（図書館
学術情報センター2F）

<発表者と発表題目>

小西咲子先生（スペイン語通訳者、関西外国語大学他講師）
「リスニング指導：聴解力と音声パフォーマンス向上のためのトレーニング法」

－ 発表要旨 －

リスニング指導：聴解力と音声パフォーマンス向上のためのトレーニング法

スペイン語通訳者、関西外国語大学他講師
小西咲子



スペイン語を専攻し文法知識と語彙力はある程度身につけているのに「既知語でも聴き取れない」「スペイン語らしく読めない、話せない」という学生が少なくないのは何故か。ゼロからスペイン語を習う大学生は、導入教育では文字に続いて発音・音節・アクセントから学ぶことになるが、その後の授業では教員側に音声指導に時間と労力を割く余裕がなく、さらに方法論を模索する術もないのが実情であろう。ここでは、門田修平（『シャドーイングと音読の科学』コスモピア刊、2007年）らの研究を参考に筆者が実習系科目で実践してきた指導法を紹介する。外国語の運用能力は、ともすれば学習者の動機と適性、留学経験の有無という「教

室外要因」に帰趨されてしまいがちだが、授業内で学生の聴解力と音声パフォーマンスを向上させる可能性を示したい。

CALL 教室の特徴を活かした活動の代表例が「シャドーイング」で、音源を聴覚から入力しながら口頭で再現し、音声知覚の自動化、復唱能力の向上、調音の高速化・効率化を図る訓練である。音声の忠実な再現のみに重点を置く「プロソディー・シャドーイング」や意味内容の理解にまで踏み込んだ「コンテンツ・シャドーイング」など、作業目標に応じて様々なアプローチが可能である。スクリプトの目視を伴うシャドーイングは「パラレル・リーディング」と呼ばれ、文字と音声の双方の情報処理を同時化させることによって綴りと発音、そして構文とプロソディーの関連の習得を目指すものである。いずれの場合も、学生が出力する音声を必ず録音し、教員と学生双方によるレビューを行うことが必要である。シャドーイングは作業負担が大きいだけに行き詰るものが達成感をもたらすこともあるが、自己満足に終わらせないために、作業目標をクリアしているか、要改善点はないか、結果を検証し続けることが不可欠である。

基本的な AV 機器だけを備えた一般教室では、出力時に録音を伴わないクラス斉唱や個人読みが主体となる。短文を黙読・暗記して音読させる「リード・アンド・ルックアップ」、記号を削除したスクリプトを配布し、音源を聴きながら意味の切れ目にスラッシュを入れ、抑揚に応じて矢印や疑問符を書き込ませる「スラッシュ・リスニング」等の導入訓練が可能である。「リピーティング」とはいわゆるスクリプトのない状態で音源を暗記、復唱させ、即応力よりも語彙

や文型の定着や正しい読み方の確保を目指す活動である。一般教室で学生の音声が録音できない場合でも、クラスから随時モデルを指名して実演させ、その場で講評や矯正指導を行うなどして正しいパフォーマンス



を目指すことが不可欠である。

以上のような各訓練を行う場合、忘れてはならないのは「実習を単なる儀式にしない」ということである。まず学生の初期状態を確認し、根本的な発音練習が必要なのか、僅かな矯正だけで足りるのかを判断し、訓練の目的・目標を明確にしなくてはならない。次に、教材選択に際して内容・語彙・構文のレベルで学生の読解力よりも難易度の低いテキストを選び、作業目標に応じてボリュームと速度を調節することが望ましい。理解を伴わないリスニングがもたらすストレスは却って逆効果である。そして、前述の通り学生が声に出すものは可能な限り録音し、録音できない場合も必ず教員からフィードバックを与えて各自の音声面の美点や課題を指摘し、やがて学生自らが自覚的に問題修正を行えるように導くことができれば訓練は成功といえる。

<参加者の感想>

関西外国語大学教授

Luigi Alberto Di Martino

La presentación de la Profesora Konishi ha sido muy útil para hacernos más conscientes de las dificultades enfrentadas por los estudiantes en cuanto a pronunciación y comprensión oral y a los medios de que disponemos para enfrentarlas en las clases de ejercitación y conversación, medios que son el producto de investigaciones recientes.

El método de lectura paralela, su grabación y la escucha y revisión de la pronunciación junto al profesor pienso que puede ser efectivo para mejorar la pronunciación. El método de escuchar frases incompletas y tener que completarlas ayudará a mejorar la comprensión oral.

Como ha indicado la Profesora Konishi, para que estos métodos sean más efectivos, es necesario tener en cuenta el nivel de los estudiantes en relación al grado de dificultad de los textos. También se necesita en lo posible una atención personalizada a cada estudiante y clases en que los niveles sean lo más parejo posible.

Pienso que el hecho de que los estudiantes se vean obligados a hablar

con frecuencia (en el caso de la lectura paralela) y a pensar en los significados (en el caso de completar frases y expresarlas oralmente) hará que mejoren a la vez su pronunciación y la comprensión de lo que escuchan a través de un proceso continuo de ensayo y error. Muy posiblemente esto ayude a motivarlos más a hablar y a hacer esfuerzos por comprender lo que escuchan.

Quiero agradecer expresamente a la Profesora Konishi por su clara exposición y la contribución que ella significa para la mejora de nuestras actividades académicas.

<総括>

関西外国語大学教授 和佐敦子

今回は「リスニング指導」をテーマとして取り上げた。本学非常勤講師で、スペイン語通訳として多方面で活躍されている小西咲子先生に発表者としてお越しいただいた。当日は本学のスペイン語教員や大学院生だけでなく、他大学からの参加者を含め約30名の参加者があり、通訳養成メソッドを応用した様々なリスニング指導の方法を体験した。CALL教室やLL教室を利用した活動の紹介に続き、一般教室のAV機器でも可能なトレーニング法が紹介された。日々の授業で音声指導を行うことは時間的にも難しいと感じていたが、授業内で学生の聴解力と音声パフォーマンスを向上させる方法を知ることができ、大変有意義な研究会であった。参加者からも早速授業に応用したいという意見が多く寄せられた。

国別リレーエッセイ

<ペルー>

関西外国語大学教授（大阪大学名誉教授）

染田秀藤

今からちょうど30年前の1982年4月、私は国際交流基金の要請を受けてペルー・カトリック大学の客員教授として初めてアンデスの土を踏んだ。以来現在に至るまで、毎年のようにペルーを訪れ、いつの間にか渡航回数も、三度にわたる同大学の客員教授としての長期滞在を含め、優に50回を越えるまでになった。継続的なフィールド調査が必要不可欠な考古学者や文化人類学者ならいざ知らず、アンデス史研究者の末席を汚す私が足しげくペルーを訪れる機会に恵まれたのは稀有なことかもしれない。したがって、ここでは、30年間ペルーへ通いつづけたひとりの歴史家として、最近ペルーで感じたことの一端を書き綴り、ペルー紹介の義務を果たしたいと思う。

ペルーといえば、誰もが頭に浮かべるのは、「謎の空中都市」とか「インカの失われた都市」と形容される遺跡マチュピチュであろう。おそらく、この駄文が活字になる頃、東京では「インカ帝国展—マチュピチュ『発見』100年」が開幕し、見物客で賑わっていることだと思う。同展は、イエール大学の考古学者ハイラム・ビンガムが遺跡を「発見」して100周年を迎えたのを記念して開催されているが、ここで注目したいのは、「100年」が意味する歴史の重さである。その「100年」には、19世紀前半にスペインから独立したものの植民地時代の負の遺産を克服できないまま20世紀を迎え、さらなる荊棘の道を歩まざるをえなかったペルーの苦難の歴史が凝縮しているのである。過激なテロ活動による政情不安と社会混乱、それに国際金融機関から融資不適合国の烙印を押されるほど悪化した経済状態に喘いだペルーが



ようやく自立への道を歩みはじめ、欧米の大国を相手に自己主張を行なえるようになったのは実はごく最近のことである。そして、それを象徴するのが、今世紀に入って、かつてマチュピチュを築いた人びとの末裔である先住民インディオが人口の大多数を占めるクスコ市を中心に、同遺跡で発掘された遺物を 100 年にわたり独占的に保管してきたイエール大学に対してその返還を求める運動が起きたことだろう。

その運動は国民的広がりを見せ、最終的に当時の大統領（アラン・ガルシア）がオバマ大統領に直訴するにいたって決着し、遺物はペルーへ返還されることになった。そして、2011 年 3 月、その一部がペルーに返還され、クスコの国立大学に保管されている。複雑な問題が絡むのは理解できるが、文化遺産はやはりその文化を築いた人びとの目に見えるところに保存されるべきだろうと思う。ところで、リマ市内には、チャンカイ文化を代表する繊細かつ見事なレース編みが展示されていることで世界的に有名な天野博物館がある。30 年前、その創立者である天野芳太郎氏と面談したとき、同氏は「文化遺産は国民の共有財産であるから、入場料を徴取して見せるべきものではない」という意味の話をしてくださった。今、その言葉の重みを痛感せざるを得ないのは私だけであろうか。



《編集後記》

創刊号ということで、まったくの白紙から始めないといけなかったのですが、たくさんの方々に助けていただき、なんとか刊行にこぎつけることができました。まだまだ年間活動は少なく、ここに掲載する内容も限られていますが、今後はもっと活動を広げ、様々な声を紹介していきたいと思っています。今後ともイベロアメリカ研究センターにご協力のほど、よろしくお願いいたします。

イベロアメリカ研究センター

副センター長 辻井宗明